

序論)

みなさん、おはようございます。今日読んだ箇所は、有名なインマヌエル預言と呼ばれる箇所です。マタイはこのイザヤ書の預言を引用して語っています。みなさんもよくご存知のマタイの福音書 1 章 23 節をお読みします。

マタイ 1:23

「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。

主イエスキリストはまさにこの解き明かしの通りに、処女マリヤから男の子として生まれ、そして、私達に神様が私達と共にいてくださる。ということをしめしてくださいました。だから、イザヤ書 7 章 14 節の

7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

というこのみことばは、イエス・キリストの御降誕を指し示している旧約聖書の預言ということができます。

ところが。イザヤ書 7 章の文脈からみると、今日読んだ 10 節から 17 節の預言は、イザヤたちが生きていた時代の 700 年後に、イエス・キリストによって実現する預言というよりは、イザヤたちが生きていたその時代に実現する預言として語られています。

ですから、イザヤ書 7 章の預言は、700 年後にイエスキリストの御降誕によって実現する 14 節の預言と、イザヤやアハズ王たちが生きていた時代に実現する預言と、2 つの預言がまるでひとつの預言かのように語られている箇所なのです。そのため、ある聖書学者たちにいわせると、今日の箇所は、旧約聖書の中で一番理解が難しい箇所だと言われています。

ですので、私はこの箇所からメッセージをすることを選んだはいいけども、実際に調べて難しい箇所だとわかって少し後悔しました。

先にいっておきますが、この箇所に対する聖書解釈はいくつかあります。でも、私はそのいくつかある聖書解釈のどれが正しいかということをお断りせずに、わからないことはわからないままにしながら、今日の箇所から教えられることをみなさん

に分かち合わせていただこうと思います。

預言の背景)

まずは、この御言葉がどのような状況の中で語られたみことばなのかをお話します。時は、紀元前 735 年 シリヤ・エフライム戦争と呼ばれる出来事が、今日の御言葉の背景となっています。

イザヤは南ユダ王国の預言者なので、今日の預言は、南ユダ王国の王様アハズ王に対して語っているみことばです。アハズ王は第二列王記 16 章 2-3 節でこのように語られるほどの悪い王様でした。

16:2 アハズは二十歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼はその父祖ダビデとは違って、彼の神、【主】の目にかなうことを行わず、

16:3 イスラエルの王たちの道に歩み、【主】がイスラエルの子らの前から追い払われた異邦の民の、忌み嫌うべき慣わしをまねて、自分の子どもに火の中を通らせることまでした。

こどもを偶像に捧げるために火の中を通すっていうのは、神様がカナンの民を徹底的に滅ぼしなさいと命令された原因になるできごとです。つまり、アハズ王は神様によって滅ぼし尽くされても不思議ではないような悪事を行っていた悪い王様だったのです。そのような王様の時代、南ユダ王国は、北イスラエル王国とアラム王国の連合軍に攻められていました。なんで攻められていたかという、当時はアッシリアという大きな国が周辺諸国をどんどん滅ぼしていった時代で、北イスラエル王国とアラム王国は、そのアッシリアに対抗するために南ユダ王国も巻き込んで一緒に連合軍を作ろうとしていました。しかし、独自の道をいこうとしていた南ユダ王国ヨタムは、イスラエル・アラム連合と一緒にすることを拒んでいました。だから、ヨタム王が死んでアハズが王様になった時、イスラエル・アラム連合は南ユダ王国を力づくで従わせるために、攻撃を仕掛けてきたのです。その時の南ユダ王国の人々の気持ちが、イザヤ書 7 章 2 節でこのように語られています。

7:2 ダビデの家に「アラムがエフライムと組んだ」という知らせがもたらされた。王の心も民の心も、林の木々が風に揺らぐように揺らいだ。

エフライムというのは、北イスラエル王国のことです。南ユダ王国の人々は、アラム・イスラエル連合の噂を聞いて、非常におびえてしまいました。そんな時に神様がイザヤを通してアハズ王たちを励ます預言を与えられました。それがこの 7 章の前半の預言です。主は何を言われたかという、簡単に言えば、「怖がらないで気を

確かに持ちなさい。」ということと、「アラム・イスラエル連合が攻めようとしているけども、彼らの思い通りにならない。あなたたちは私を信じなさい」ということを、イザヤを通してアハズ王に伝えたのです。

ところが、今まで神様に従ってこなかったアハズ王は、その預言を信じることができなかったようです。だから、神様がもう一度、アハズ王たちを奮い立たせるために語ったのが今日の預言なのです。

主がアハズに求めたこと)

神様はまず、アハズに何を求めたのでしょうか。11 節を読みましょう。

7:11 「あなたの神、【主】に、しるしを求めよ。よみの深みにでも、天の高みにでも。」

「よみにあるものでも、天にあるものでも、何でもあなたが神様を信じるために、しるしを求めてみなさい。」そう神様は不信仰なアハズに言われました。本来は神様にしるしを求めるということは、神様を信じていない証拠ですからやってはいけないことです。でも、神様は、アハズが不信仰だということをわかっておられるので、その不信仰な者に信仰を持たせるため、「しるしを求めてみなさい。」と言われたのです。でも、アハズはなんと言ったのでしょうか。12 節。

7:12 アハズは言った。「私は求めません。【主】を試みません。」

確かに申命記には【主】を試みてはいけない。ということが書かれているので、アハズのこのことばは、信仰深いことばのように思いますが、神様自らがしるしを求めなさいといわれたならば、信じる者はその言葉に従うべきでした。でも、アハズは【主】なる神様に頼ることを拒んでいる悪王でした。あくまで自分たちの力でなんとかしたい。そのように思っていた人だったので、アハズは一見信仰深そうなことばで、神様に従うことを拒否したのです。だから、イザヤは 13 節のように言います。

7:13 イザヤは言った。「さあ、聞け、ダビデの家よ。あなたがたは人々を煩わすことで足りず、私の神までも煩わすのか。」

みなさん、どんなに信仰的言い訳をしたとしても、【主】がいわれたことばに従わないのであれば、それは不信仰だし、【主】にとって迷惑になることをしているのです。みなさんは、色々な言い訳をして【主】に従うことを拒否していたりはしてい

ないでしょうか。

インマヌエル預言)

イザヤは、アハズが神様を煩わせていると語りながらも、神様の預言を語ります。その1つ目が、14節のみことばです。一緒に読みましょう。

7:14 それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。

「それゆえ、主は自ら、あなたがたに一つのしるしを与えられる。」とありますけども、「それゆえ」ってどれゆえですか？ アハズがあまりにも頑なで、不信仰で、不従順だからです。

神様は、私達が頑なで、不信仰で、不従順だからこそ、処女マリヤからイエスキリストが生まれるという特別な奇跡によって、救い主が生まれるようにされたのです。救い主が処女から生まれるという。あの出来事は、私達、人間が不信仰だからこそ、一つのしるしとして神様がなされた御業なのです。

では、あの処女降誕は何のしるしなのでしょう。それは「インマヌエル」。神様が私達と共におられる。ということを示す。しるしなのです。

みなさん、普通の人間の営みで処女から男の子が生まれますか？ 最近は不妊治療の一つとして、人工的に受精をさせて、それをもう一度女性のお腹に戻す。という技術がありますが。例えそのやり方であったとしても、女性の卵子と男性の精子が必要です。男と女が必要なことは変わりません。

でも、聖書がいう処女降誕とは、男性をしらない処女から生まれるのであって、男性との結びつきはありません。それで子供が生まれるということは普通ではありえないことです。でも、その状態で子供が生まれるということは、そこに神様が働かれなければ、ありえないことです。

だから、【主】はご自分が共におられることを示すために、神様なしではありえない奇跡を通して、救い主イエス・キリストが生まれるようになされたのです。

【主】は奇跡を起こしてでも、不信仰な者に【主】が共におられるということ信じさせるために処女が身ごもって男の子が生まれるという御業をなされたのです。だから、キリストの御降誕は【主】が不信仰な私達と共におられることを示された奇跡の出来事なのです。それが14節の預言の意味です。

イザヤ時代への預言)

ところが、14 節の次の 15 節からの預言は、700 年後に、キリストによって実現する預言ではなく当時のイザヤやアハズ王たちの時代を実現する預言となっています。

7:15 この子は、悪を退けて善を選ぶことを知るころまで、凝乳と蜂蜜を食べる。

「この子」というのは普通に考えると 14 節で語られている処女から生まれる男の子のことですが、聖書のどこを見返してみても 14 節のみ言葉の通りに処女から生まれた男の子というのはイエス様以外、見当たりません。

考え方の一つとしては、神様は、聖書には書かれていないけどもイザヤの時代に、イエス様と同じように処女から生まれる男の子を地上に送ったのかもしれませんが、もしそのような奇跡的な生まれ方をした子供がいたら、聖書に出てきていないということはありません。

ですから、確かなことはわかりませんが、恐らく神様は、しるしを求めなさいといっているのに、しるしを求めなかったアハズの不信仰の故に、アハズが生きていた時代には、この奇跡の子供が生まれるという御業はされなかったのだと思います。だから、14 節の預言は、イエス様によってのみ、唯一実現するしるしとされたのです。

しかし、イザヤ時代にインマヌエルと呼ばれる男の子はうまれませんでした。それ以外の神様のご計画は実現したのです。それがいつ実現したかということ、もしこの時にインマヌエルと呼ばれる男の子がうまれたなら、その子が「悪を退けて善を選ぶことを知るころ」つまり、物心がつく 2 歳か 3 歳ぐらいになるころに 16 節以下の預言が実現しました。16 節を読みましょう。

7:16 それは、その子が悪を退けて善を選ぶことを知る前に、あなたが恐怖を抱いている二人の王の土地が見捨てられるからだ。

「二人の王の土地が見捨てられる」というのは、アラム・イスラエル連合のそれぞれの王様が殺されるということです。実際、この預言がされた 3 年後には、アラムの王様レツィンはアッシリアによって殺されてしまいます。そして、その 10 年後には北イスラエル王国のペカ王も同じくアッシリアによって占領されたときに、ホセという人に殺されてしまいます。北イスラエル王国のペカ王が殺されるのは結構後ですが、実際、アラムの王様が殺された時には北イスラエル王国もアッシリアに滅ぼされる間近の状態になっていたため、「二人の王の土地が見捨てられる」という預言は、この預言が語られてから幼子が物心つく頃、つまり 2,3 年後に成就したといえると思います。

そして、神様の預言はアラム・イスラエル連合だけではなく、アハズがいる南ユダ王国についても語っています。それが 17 節

7:17 【主】は、あなたとあなたの民とあなたの父の家に、エフライムがユダから離れた日以来、まだ臨んだこともない日々をもたらす。それはアッシリアの王だ。」

つまり、これはアッシリアによって南ユダ王国の歴史上これまでなかったほどの災難を経験することになる。という預言です。実際にどのような災難を経験するかは、続く御言葉を読めばわかりますが、今日の箇所ではないので今日は省略します。

まとめ)

最後に、ここまでの話をまとめます。つまり、今日のイザヤ書 7 章 10-17 節の預言はどのような預言かということ、神様は悪王であり、心が頑なで、不信仰な者であるアハズが【主】を信じるようになるために、しるしを求めなさいと言われました。でも、アハズはそれでも心を頑なにしてしるしを求めなかったがゆえに、神様が共におられるしるし、インマヌエルという男の子を見ることができなくなったのです。そして、そのインマヌエルと呼ばれる子以外の預言。アラム・イスラエル連合が滅ぼされ、南ユダ王国も今まで経験したことがなかったような災難をアッシリアによって経験するという預言を体験することになります。

みなさん、【主】は不信仰な者、不従順なもの、心の頑ななものに、神様が共におられることを示すために、神様以外できない。処女から男の子が生まれるという奇跡を、イエスキリストによって実現してくださいました。

だから、イエス様は処女から生まれたのです。だから、私達は処女降誕というイエス・キリストの御降誕の御業を覚えるとき、アハズのように心を頑なにしてこのしるしを拒否するのではなく、心を柔らかくしてありのままこのしるしを受け入れていきましょう。

処女によって救い主が生まれるという奇跡をなさった神様は、イエス・キリストによって間違いなく私達と共にいてくださいます。なぜならば、【主】イエスキリストは、神様が共にいてくださるというしるしだからです。

例え、強大な敵に攻められているような状況であったとしても、このままでは自分は滅びるしかないと思えるような状況であったとしても、【主】は私達と共におられます。どんなときも、処女マリヤから生まれたイエス・キリストを信じ、【主】が共におられることを信じていきましょう。

それこそが今日のみことばが私達にもとめているメッセージです。